

第9号 華山会報

平成14年10月11日
財団法人華山会

華山先生を語る

愛知大学教授・成章高等学校同窓会長 河 合 秀 敏



田原町立田原西部小学校に入学したときに黒板の上のところに渡辺華山先生の肖像画（椿椿山筆）があった。目の鋭さに怖さを感じた記憶がある。詳しい説明はなかったように思う。偉人ではあったが切腹した人。謎めいた戸惑いが子供心に走った。二年生になると太平洋戦争となり、尋常小学校が国民学校と変わり、それとともに華山先生の肖像画は皇居の二重橋の写真にとってかわられた。成章中学（旧制）に入学することになった。華山先生と山本右太郎氏の話がそれとなく聞かえてきたが、田原藩の藩校であった成章館についての話はどうか語られることはなかった。成章高等学校になつてからもこの種の話にふれることがなかったように思う。成章の由来は論語の「斐然成章」にあるというのほほとどの歳になつてからのこと。お膝元にいながら浅学を嘆くばかりである。華山先生の塾居された場所は成章高等学校に接した池ノ原であり、そこが自刃された場所でもある。

田原駅の近くに城宝寺がある。華山先生の墓はここにある。どうして城宝寺なのか。史実に基づくものではないが、藩士寺説と検視人檀家説があるようだ。この寺には「腹切りの天井」があった。華山先生の家の一部が持ち込まれたという。いまは亡き泰雲上人（住職）から直々に聞いたことなので忘れ難い。城宝寺では書院と呼んでいたが七年程前に建て替えられてしまった。隣接する巨木が家を持ち上げてしまったことから新築したということである。いまとなつてはその「腹切りの天井」は謎につつまれたままとつた。江戸からの検視に二ヶ月を要したという説もあるが、これも伝聞にすぎない。華山先生の墓前の石碑には「見よや春 大地も亨す 地蟲さへ」の句が刻まれている。世を先導する思想家の若き思いが謳われた句である。成章高等学校の講堂の緞帳にもこの句が織り込まれている。城宝寺の華山霊牌堂は、華山先生の遺徳を偲び、顕彰するために泰雲上人の時に建立されたものである。

平成十二年十月、田原町は米国ケンタッキー州ジョージタウン市との姉妹都市提携十周年を記念してジョージタウン大学で華山展を開催した。白井孝市町長からスピーチを依頼され「華山の世界」をテーマとした。地元出身のよしみで引き受けてはみたものの、華山研究については素人であるから、なんとも心許ないものとなつてしまった。御世話をいただいた各位に礼を失していたがこの場をかりて改めて感謝の意を表したい。



田原城跡

華山劇の思い出

愛知県議会議員

鈴木 愿

「華山会報」も第九号となり、每号きれいなカラー印刷で、読みやすく、また、貴重な資料としても充実されてきました。これも華山・史学研究会や博物館友の会の皆さんの多大なご協力とご支援の賜と深く敬意と感謝を申し上げます。

「華山劇」のことは、この会報でも何回か記事となりましたが、私の想いをふれてみたいと思います。

昭和二十年四月、終戦の年に田原中部小学校に入學しました。

むかしの「講堂」は、外からも内からもとても風格のある建物でした。

舞台右袖には、華山の立志像があり、左右の壁には、華山像をはじめ孔子像などの額がはめられ、正に博物館のようでもありました。

当時の華山劇は専ら「板橋の別れ」でした。時の華山役は、学校中のヒ

ーローでありました。同級生の、小嶋三義・榊原庄三両君のあのりりしい姿がいまでも鮮やかに浮かび、澄んだ歌声も聞こえてくる強い印象が残っています。

私は、合唱の一員として舞台横の幕の中で歌った覚えがあります。歌だけでも華山劇の一員になれたことが、とても誇りでもありました。

昭和九年の初演以来、六十有余年学芸会の花として上演しつづけております。

田原といえば「華山」、中部小学校といえば「華山劇」、という代名詞となっています。

華山先生の生き方を、この劇を通して近代・現代を顧みる絶好の教材とするためにも、いつまでも上演しつづけられることを願ってやみません。

そして、この「華山劇」が町の歴史と郷土の先覚者を思い起こし、敬う起爆剤にならないものか、と考えるものです。



目次

- 題字「華山会報」華山会理事 小澤耕一
- P 華山先生を語る 河合秀敏
- P 愛知県議会議員 目次
- P 画家渡辺華山の心象 『客坐掌記』
- P 退役願書之稿 (5) 田原町博物館所蔵品から
- P 『閔損像』(孔門十哲像の内) 華山・史学研究会だより
- P 「自筆獄中書簡」 渡辺華山の
- P 「自律狂歌草稿」鑑賞(1) 各地の美術館を訪ねて
- P 「吉澤記念美術館」 田原南部小学校で 聞きました
- P 「華山を知っていますか？」 財団法人華山会 田原町博物館 からご案内

画家渡辺華山の心象

重要美術品 渡辺華山筆客坐掌記

天保三年（一八三二）紙本墨画淡彩

縦一九・八cm 横一三・〇cm

個人蔵

渡辺華山は、文化六年（一八〇九）に関東文人画界の大御所谷文晁につき、画塾写山楼に出入りするようになります。塾では、中国古画や狩野派、南蘋派の絵の模写を行なったり、洋風画も学んでいます。谷文晁は自分が見た作品や風景、器物等をスケッチし、縮図冊として保管し、後に作画の参考としています。華山もこういう文晁の作画姿勢に影響されて、多くの縮図冊を残しています。最も若い時期では、写山楼入門直後の「縮図」（文化七年）が知られ、田



原塾居後で、最晩年の「翎毛虫魚冊」まで、現在残っているものだけでも約六十冊ほどが知られています。晩年には、自分の背丈と同じくらい高く積めるほどたくさんの縮図冊を保有していたという話も伝えられています。いくつかの未発見の縮図冊も紹介されています。

この「客坐掌記」が書き始められた天保三年は、華山にとって多くの出来事があった年で、五月十二日に三河田原藩の江戸家老である年寄役に昇進する年です。また、海防掛になり、田原藩隠居格三宅友信が居住する藩下屋敷巢鴨邸を中心に蘭学研究を本格的に始めています。この「客坐掌記」の末頁に「高野長英」の記述が見られ、二人が交流を始めた時期もこの年と考えられています。紀州藩流木の藩領民による掠取事件や助郷免除の幕府への上申もしていますし、長男の立も十二月二十

日に生まれています。題簽に「客坐掌記、天保壬辰、全楽堂」の墨書があり、表紙右上に「辰一」、右下に「計七冊」とあります。九十丁以上の紙面があり、途中の「勸進能舞台図」には「二月二十六日」の記述があり、年の初めからこの冊子を使用していると思われる、この年に七冊書いたうちの一冊目と考えられます。これ以外の月日の記載は無く、ほとんどが自分で見た作品の記録で、能舞台については、演劇の場面が十三図あります。後半には、蘭書からスケッチしたと思われる頭骨や外国の人物が描かれた屏絵も登場します。華山の鋭い観察眼と向学心を知り得る貴重な作品です。昭和十六年四月九日に重要美術品に認定されています。

田原町博物館学芸員

鈴木利昌

退役願書之稿五 (五)

華山が退役を決意した理由として、小澤耕一先生は、次の五点を挙げています。(『華山渡辺登』華山会刊)

後継者として頼り望みをかけていた第五郎の病死

羽倉外記の伊豆諸島巡察への参加が、華山が家老職ということで許されなかった

天保の飢饉の救荒施策が大成功で、華山の手がけた藩政が一段落をつけた

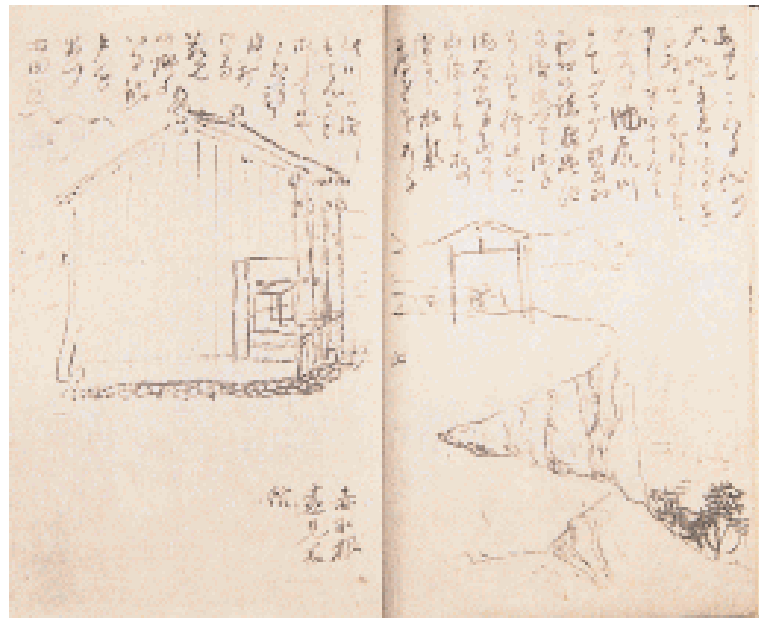
藩経済が收拾しようもない行き詰まり状態であった

国家老の内命を受け当惑した

そして、華山の心を「田原藩の一家老、一執政として満足してはられない」「天下の自由人としての活躍を意図」していたと推測しています。

(同書九〇ページ)

華山は、天保三年(一八三二)海岸掛を命じられ、「外国の様子が分からなくては対策をたてることができない」(『慎機論』)として、海外事情の研究に取り組みます。こうしたなかで、高野長



参海雑誌 赤羽根遠見番所

英らの蘭学者との交友を深めていき、華山の目は次第に外国へと向いていきます。こうした状況のなかで、小澤先生が指摘されるような気持ちになるのは当然のことと思われる。

しかし、華山が外国の事情を研究し、先進的な考えを抱いても、華山には、制約があります。それが、『退役願書之稿』でたびたび触れられた華山の「家」です。先進的な考えを得ても儒教の

「孝」といつ考えにとらわれているところに華山の人間らしさを感じます。

今回紹介する部分には、華山の政治についての考えが述べられています。為政者の心構え等について書かれています。華山の真意は、田原藩への諫言にあったのかもしれませんが、藩内刷新計画・友信擁立運動、いずれも藩首脳部に阻まれ、失敗に終わっています。また、為政者となり自分の手がけた政策が思い通りにならないことへのあせり、さまざまな思いが、あったと思われる。

このような考えをいただいていたことが、『慎機論』などで、幕政批判とも受け取られる表現につながっていったのかもしれない。

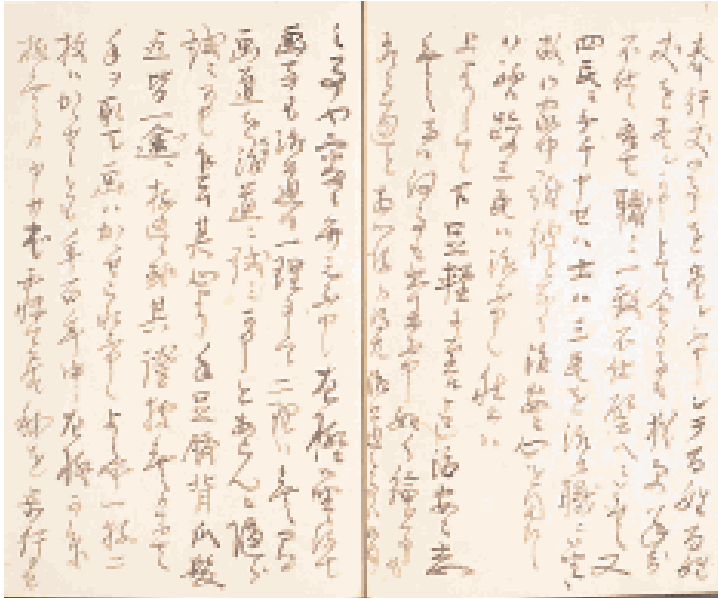
十一 本分を尽くす

画家であって絵をかくことを志さなかったり、書家であって書に意気込みがなかったりする人は、どのようにして生活をするのでしょうか。

今の諸侯はどうでしょうか。諸侯でありながら国を治めずに、家中の者や百姓に励み努めるように命令したとして、服従する者があるのでしょうか。また、奉行でありながら奉行の仕事をしなくて、百姓に百姓の仕事をするように命じても、なおさら承知しないでしょう。右に述べたことは、職と

その内容が一致していないことの例えです。

また、土農工商の四民に分けていつなら、土は三民を治めるのが仕事なので、家中の者が誰彼となく、治安に心を用いなければ、あとの三民は治まりません。だから、殿様から下は足輕に至るまで、治安に志がなければ、何事もできないようにです。絵は、右のとおりのことと心得ています。しかし、国を治める方法はどのようのでしょうか。くわしいことは私もわかりません。



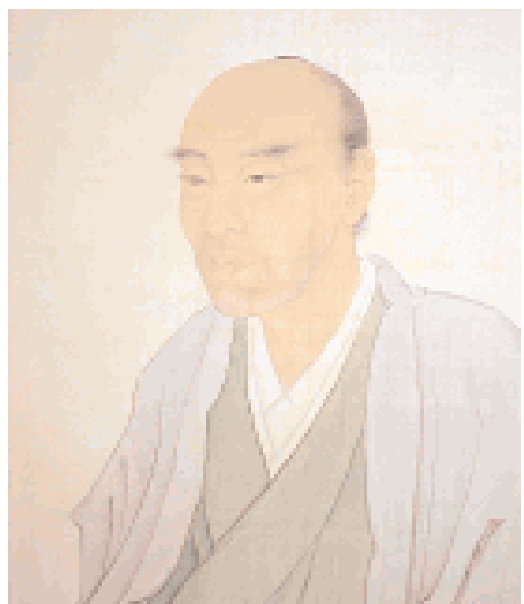
十二 政治観

このようなわけですから、画道も治道も道理は一つで、二理はないので、画道のことを治道にあてはめると言われるなら、身分相応に試みてみましょう。

絵をかく場合、心から手足・腹背・爪髪まで、みな一途に絵をかくことを承知しているのでしょうか。その証拠がなくては、手を使って絵をかかせることはできません。たとえ一・二枚はかかせられたとしても、年がら年中そのようにできるわけではありません。言うならば、寝ていて自分を歩かせてください、というようなものです。

右の通りですから、家中の者が中間に至るまで何とか殿様のことを思うようになった時は、前に述べたように全身がすべて絵になるので、病身の者は病身者がすることだけではできません。また、病身とはいっても、全身の一部のことですから、切り捨てて逃げるわけにもいきません。

あるいは、右に述べたように、中間までもそのように残りなく、殿様のことを思うようにはならないと言われるかもしれませんが、「水を引くものは源を濁さない」と言うように、どのように非常に愚かなものでも、自分が飲む水の水源のこと



重文 樗椿山筆渡辺華山像（部分）

を思わない者がいるでしょうか。殿様が満足できれば自分も満足できます。影が形に従うようなものです。

十三 今の諸侯

右のとおり、三歳の童子にもよくわかることが、そのようにならないというのは、愚かでもの道理に暗いからでなく、生活上のならわしからそのような結果になっているのでしょうか。風は勢いに生じ、勢いは一致から出るものです。一人の悪人がいれば、生活上のならわしをやぶることは明らか

かなことです。そうであるならば、善も、右のとおりであるべきです。

恐れ多くも、殿様より一途に治安なされば、家来は一瞬にして殿様のようになるでしょう。右のようは一途に思われることは、たいへんやさしいことです。かえって道徳にそむいていることを志せば、思慮多難となり、種々さまざまな苦心が生じ、安心できる日はさらになくなるでしょう。家来でも、一人か二人は道理がわかるでしょう。道理がわかっていて、殿様と考えが一致すればあとは、また、一瞬にして家中が、そのようになるでしょう。もし従わない者がいても、思い悩むことはありません。そうであっても、上下が一体となり、内外が一致するものです。その証拠もいたって、簡単に見つけることができます。

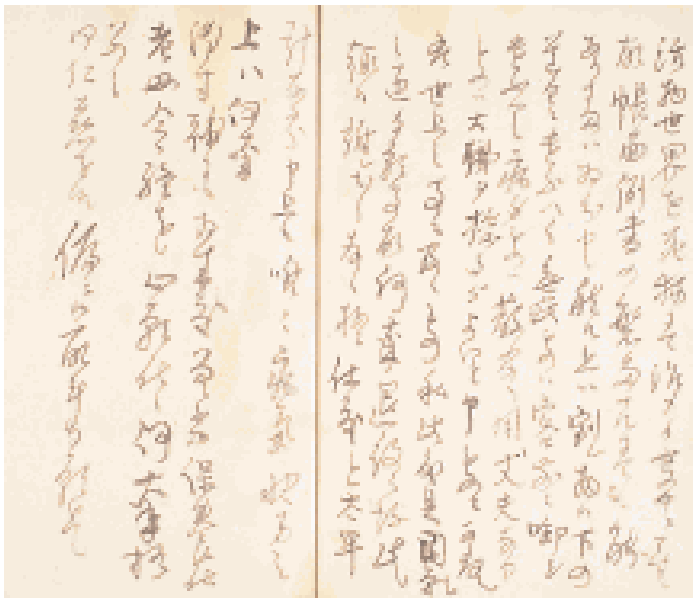
私は、右のとおりに考えていますが、今の諸侯がこのような考えをしていることは聞いていません。今の諸侯は、その職にあたって、今までの並合いや出来合いで、天下という大きな箱、諸侯という小さな箱、土という内のしきりをつくり、活物世界を役に立たないもので治めている世の中なのです。だから、帳面や故事を記した書物がたくさんになるのも、その様子はよくわかります。

こうであるので、割れた物は使用人の道具に使うようにし、無疵の物は客用におろして使うべき

です。病身の者は、たいした役目のない暇な官職に用い、健康な者は、大事な役目を与えるのがよいというのも、こういう理由だからです。

十四 退役の願い

右のように世の中のことと及んでしまったのも、私がこのたびこまかく内願したとおりのこと



をお願いしたいからです。何卒退役のこと、この趣旨をごなたにも知っておいていただきたいと思いい、はなはだ早計かとは思いますが、申し上げたいです。

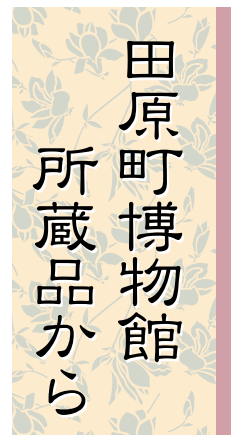
もっぱら病気がよくなつたら、なにとぞ少しでもお役に立ちたいので、さしあたっては保養し、老母の令終を心願っています。なにとぞ、格別の仁慈をもつてお取り図り願います。

華山の母・栄は、弘化元年（一八四四）没
華山の自刃は、天保十二年（一八四一）。

天保十年（一八三九）四月に「退役願書」が提出されるが、許可されず。この後、「蛮社の獄」により、五月十四日逮捕される。華山が逮捕されることを予期し、藩に迷惑がからないように「退役願書」を提出したとするのは、うがちすぎか。

以上五回にわたり、『退役願書之稿』について紹介させていただきました。できるだけ原文に沿って口語訳したため、一部分かりにくい訳になった部分があったことをお詫びします。

研究会員 柴田雅芳
(終)



重要文化財 浅尾大岳筆 閔損像

(孔門十哲像の内) 三谷東奥賛

絹本着色

縦一〇二・九cm 横三六・九cm

賛の意味は次のとおりです。

専制的な季氏(春秋時代、魯の皇帝を補佐する大夫として権力を振った家)をどうして、臣とすること

後学東奥三谷憫謹題

藐彼季氏烏得而臣
由與求也固非其倫
超然高視安乎賤貧
犬彘之祿不汚其身
置身德行其性閔閔
内稱孝友外無間言
誰其能之有偉子騫
孔門之教以孝為先



後学東奥三谷憫謹題

藐彼季氏烏得而臣
由與求也固非其倫
超然高視安乎賤貧
犬彘之祿不汚其身
置身德行其性閔閔
内稱孝友外無間言
誰其能之有偉子騫
孔門之教以孝為先

ができようか。由(季路または子路)と求(冉求または子有)は最初からそのような人物ではない。高いところから物を見て、貧乏でも構わず、権力欲のある者や暴君のもとで禄を食むようなことはしない。徳を実践することを重視し、その性格は議論を好んだ。両親兄弟ともに、孝行友愛があり、他人から非難されることはない。偉いのは、子騫で、孔子の教えを守っている。

閔損は、閔子騫ともいい、孔子と同じく春秋時代の魯国出身で、名は損、字を子騫といいます。孔子の弟

子の中で、徳の実践においてすぐれた才能の持ち主として、顔回・閔子騫・冉伯牛・仲弓があげられています。彼は孔子より十五歳年少です。孔子は閔損を次のように褒めていました。閔子騫は親孝行で、父母によく

仕え、兄弟仲がよいから、誰一人として彼の父母(母は継母であった)兄弟の悪口を言わない。彼は権臣や暴君のもとで禄を食むことをしなかつた。

落款には「大岳」とあり、浅尾大岳という尾張藩士で、谷文晁門下、文政頃に活躍した画家です。名を英

助、字は英林、牛込済松寺門前に住んでいました。文政元年の『江戸當時諸家人名録』に登場します。賛者は、佐藤一斎の門人です。

この作品は、昭和三十年二月二日に重要文化財に指定された渡辺華山関係資料の附として、同三十二年二月九日に追加指定され、昭和五十三年三月二十四日に歴史資料に指定替えられました。

田原町博物館学芸員

鈴木利昌

華山・史学研究会だより

華山の書 3

重要文化財

自筆獄中書簡（椿椿山宛）

天保十年六月二十七日付

華山・史学研究会では平成十二年度から、渡辺華山直筆の書を主に研究資料として扱っています。この手紙は、華山が獄中より自分の救済に奔走している高弟の椿椿山に宛てたものです。椿山の救済運動に対して厚い温情を示し、投獄の原因について真相究明の諸状況を箇条にまとめました。研究会では平成十四年二月二十三日にテキストとして扱いました。また、田原町博物館の平成十一年秋の企画展「渡辺華山の書」で展示されました。寸法は縦二四・三×横一三二・二cmの横長の形状です。

(解読文)

毎書感涙三不堪、其所言ヲ不知候。尊兄八情実ヲ以テ御極、藩人八義理ヲ以テ護持致、必竟スル処皆御愛憐之外無之、感謝無量ニ候。初尊兄ノ言ハ小生之実事ニテ、藩人之言ハ小生之虚称に御座候。必竟此度ノ災ハ虚称ニ生シ候ニテ、唯時運の會計に八無之、謹而兄ノ言ヲ読候処、一々実際に入、小生ノ平白ヲ見ル如クニ御座候。是ハ兄骨肉の交リ故、小生肺腑ニ入候如ク、一も虚設無之候。唯江印交ニ兩年來也。御存之通、忠胆無一寛永已上ノ人物也。一体御近所川印より噂ナトにて相合候ニテ、此江印抑杞憂アリテ海岸隸スル所ノ地多、ソレ故地理承り度、何卒入門ノ願など御頼ナレトモ、御存之通人ニ咄候程之事も出来不申、況教ナト思ひもよらぬ事ニ御座候。然ルニ



右令八直裁ナル御人故、一字にても師八則師ナリナト被申、迎送も御丁寧ニテ御座候。これ以一時之戯同様ナル事ニ八御座候得共、御直情ハ右之通ニ御座候。然処当春御用旅中、私所持之目かね測量器等途中より御借用被成度とて、度々往復之御手書有之、御帰府後ハ御用多にて左程御目にかゝらず候。右之通往復書と申、且上田喜作と申藩人、其師内田弥太郎ニ随ひ測量手伝致候事ニ付、多分ソレヲヨリ此禍起リ候事ト被察候。果テ一同右風評有之ニ及候。一 外夷之事ハ当路御掛リ方へ八度々御話ニ及候事も有之、已書物も差出候事も有之、昨十月頃申上候事も有之、此節ニ及、少シハ内扶も有之哉。此義ヲ一々申上候得は、私実情ハ忍相分リ候得共、御名前ヲ申上ル恐入慎ニ候事



故、椽下ニ力ニ相成候。一 尊兄書、尤私性質ヲ尽し事実モ審ニ御座候。御存之通りキミタル事ハ好候様ナレトモ、性実ハ山林之質ニテ柏手ニナリ、有為者之如ク致居候也。これと申も胸中種々不得止義有之。此度奇禍ヲ蒙リ候程ナル事も、年來之工夫あやまりにて御座候。乍去外異の憂タル事ヲ思過シ候得は、又給事も止メニ致可申哉と、心カワリ候事も有之候。一 尊兄私之氣ヲかね其御実情之止ムヘカラザルヨリ此書御計ヒ被下処、真兄弟ニ勝り涙のミ袖ヲ湿シ候。乍去又御今未ノ御請方慷慨ヲ虚張致。ツマラヌ所へ廉立候而ハ御計も無益など、ソレヨリソレへ御配慮之事ト奉察依之此推察ヲ申上、已後ハ今未之節決テ客氣虚張ハ不仕、被仰下候趣ニ御受可申候。





一 二十一日御今未 申上候通ニテ猶御考可被下候。私
 事軽ク候テ在所行永誓居ナルヘシ。唯差
 当リノ不孝ニ迷ひ候のミ、外ハ破鞋ヲ舎ル
 如クニ御座候。

一 可笑事ハ一タ認候ツマラヌ書物ニテ、
 其書中何ヲ認候哉覺不申、此度願候而
 写本ヲ勿々ニ一枚読候処、此間申上候通
 其意も不尽もの、これハ残念無限候。
 必竟御存之通、浮躁疎大之性
 此寄禍ヲかもし申候間、依之四月己采
 東坡力言ヲ以罪ヲ得候より、稽叔夜之養
 生論ヲ認候事ヲ思ひ出、節録致貼壁仕
 候処、則それ力先兆と相成候、私心事
 ノ蹉跎タル事御察シ可被下候、頓首

六月二十七日 花
 三内兄下

(口語訳)

お手紙を頂戴すること感涙に堪えず、そのお礼の言葉がありません。あなたは真心の限りを尽くされ、藩の人達は義理をもって私を守りおし、つまりは皆様のお憐れみの気持ちがあふれていて、非常に感謝しています。さてあなた言うことは私について本当のことですが、藩の人達のいうことは誤りです。つまりはこんどの災いはとりとめもないところから生まれたもので、ただの運命のめぐり合わせではなく、謹んであなたの言葉を読んでみますと、一つが本当のようで、私の常を見るようです。これはあなたと骨肉の交わりの関係にあり、私の核心を突くようで、一つもうそはありません。ただ江川太郎左衛門英龍と交流したのはここ一・二年だけです。ご存知のとおり、忠義の心は二つと無い寛永以前の立派な武士の心をもった人物です。そもそも近所の川路三左衛門聖謨からの噂などを合わせると、この江川は非常に憂国の志があつて

海岸に接する領地が多いので、それゆえ地理を学びたく、なんとか入門を願ひ頼まれたのですが、ご存知のとおり他の人に海防問題について話すようなことはできず、ましてや教えることなど思いもよらぬことです。そこで江川は率直な人なので、一文字でも師であるならすなわち師匠であると申されて、応対も丁寧でした。これは一時の座興のようなものでしたが、本当の事情は右のとおりでした。そんな折にこの春御用での旅のなかで、私の持っていた望遠鏡・測量器等を途中から借りたいと、たびたび往復のお手紙がありましたが、江戸に帰ってからは用務が多くなつたのでそれほど会うことはありません。右のとおり往復のお手紙は、上田喜作という田原藩士が、その師にあたる内田弥太郎に随行して測量を手伝つたことで、多分そのようなところから禍が起きたものと察します。よって右のようなつわさがあつたのでござりました。

一 外国の事は幕府の役人とも

たびたび話しに及ぶこともあり、すでに書物を差し出したこともあり、昨年十月ごろに申し上げたこともあり、このことに話が及べば、老中の影響もあつたのでしょうか。これを一々申し上げれば、私の実情はすぐにはわかりませんが、お名前を申し上げるには恐れ多いこともあり、軒の下の力でした。

一 あなたの手紙は、私の性格を正しくとらえ事実を明らかにしました。ご存知のとおり派手好みのようですが、性格は本当は隠遁を好みちよつとしたはずみで、表舞台に出してしまいました。これと申すも胸のうちはいろいろとやむおえない理由はありましたが、こんど逮捕されたことは、これまでのやり方が間違つていたからなのでしょう。しかし外国の侵攻の心配をしすぎたので、絵を書くことをやめにしようかなど、心がわりしたこともありました。

一 あなたが私の気持ちを察してまことの気持ちのどつしよつものならないところをこの手紙で計らつて

くれるところには、真の兄弟にも勝り涙で袖を湿らしました。しかしまた吟味の請け方や憂い嘆くことを増して言い張っては、つまらないことで意地を張っては計らっていただいたことが無益となるので、次から次へとご配慮いただいたと考えて、これを推察し、これからは吟味のとくに決して血気にはやったり虚勢を張るような事はせず、いわれるように吟味を請けます。

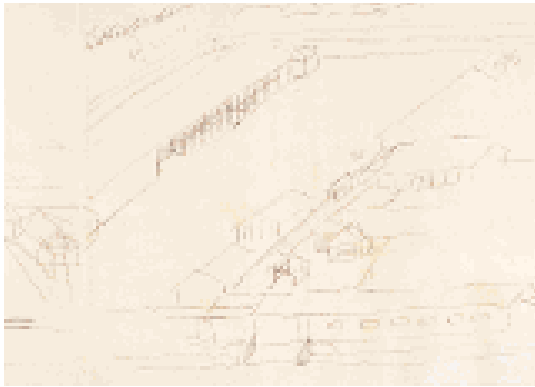
一 二十一日のご吟味で、申し上げたとおりですのでお考えください。私の罪状は軽くて在所へ行き永蟄居になるでしょう。ただ差し当たりは不孝のきもちにまよっているのみで、ほかは破れた草鞋をすてるようなものです。

一 笑うべきことはある日認められた『慎機論』のようになつまらない書物のことで、その中になにをしたためたか覚えてはいませんが、このたび願ひ出て写本を慌しく一・二枚読んでみましたところ、この間にもうしあげたとおりその意味の不明なと

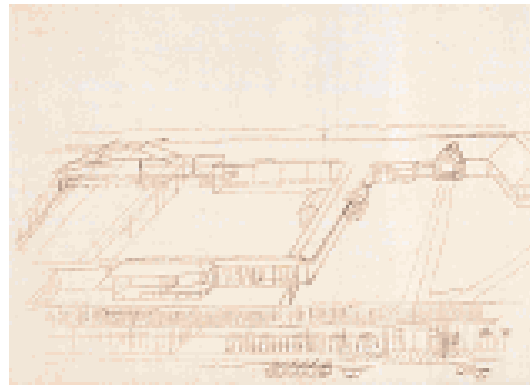
ころがあり、これは残念です。つまりはご存知のとおり、軽薄でそつかしい性格が、この思いがけない禍を起こしてしまい、これにより四月以来蘇東坡の言葉が禍して罪になつて後、稽叔夜の養生論を認めたことを思い出し、私は抜き書きして壁に貼りつけたこと、それがすなわち逮捕の前兆となりました。私の心のつまづきを察してください。頓首

六月二十七日 華山
椿山兄下

渡辺華山筆獄廷素描及び記録より



北町奉行所



奉行所白洲



奉行所白洲



奉行所内での食事



研究会員 林 哲志

渡辺華山の 自律狂歌草稿 鑑賞 (1)

渡辺華山と「自律狂歌草稿」の前書きについて

「自律狂歌草稿」には、次のような前書きがある。

蔵王山麓熊野社

蔵王山麓の熊野社

毎祭祀社頭献燈

毎に祭祀の社頭に燈を献じ、

題「狂歌」勝「畫」時

狂歌を題し畫を勝（かぎ）る。時に

天保十二年辛丑夏

天保十二年辛丑夏

藩中青年請「之先生」

藩中の青年之を先生に請ふ。

先生苦笑稍久即夜戯

先生苦笑し稍や久しくして即ち夜戯れに

口「吟狂体百人一首」

狂体百人一首を口吟す。

録「以授」之云惜哉

以て録し之を授けて云ふ。惜しい哉、

散佚不「完」僅存

散佚して、完からず。僅かに

四十六首「耶」

四十六首を存するのみと。

大正二年春二月

三州田原華国木知識

この三州田原華国木知識というのは、田原藩士鐫木轍の長男鐫木華国のことだ。この「自律狂歌草稿」は華山の書いたものとして同家に伝わっていたものを鐫木華国がこの前書きを自ら付けて「華山先生 自律狂歌草稿」と題したのである。「自律」と書いているが、何故この狂歌が自らを律するという意味になるのかは、命名の理解に苦しむところである。

年辛丑夏、藩中の青年がこれを先生にお願ひした。先生は苦笑し、稍や経つてからすぐさま夜戯れに狂歌体の百人一首を口で吟じだした。それを記録し、これを青年に与えて云つた。惜しい哉、どこかに散逸してしまつて、完全ではない。僅かに四十六首があるだけだよ。」

恐らくはこの狂歌の作が天保十二年辛丑夏という自刃の直前であることからか、或いは華山の忠孝の名が高まつてきたことで、自律の名を付ければより効果的かと考え、中身もすっかり検討することもしないで命名したのではなからうか。「自律」を「自筆」と題名を書き変えてある書もある。

前書きの意味は次のようである。

「蔵王山麓の熊野社では、つねに祭祀の社頭に燈を献じて、狂歌を題し畫を勝（かぎ）る。時に天保十二

天保十二年辛丑夏の作であるということが果たして確かなものか否かについては、証拠となるものはなく、今はこの前書きを信じておくしかないが、これによつても分かることあり、この『狂歌草稿』は、華山が天保十二年（一八四一）辛丑の夏に田原の蔵王山麓の熊野社の祭祀に際して、藩中の青年からの要請により戯れに作ったものである。『華山先生自律狂歌草稿』という、題は鐫木華国が後になつて仮につけたもので華山の直筆のものに書いてある訳ではない。「自律」ということは内容とはおよそ無関係で、的はずれの命名である。

だが、『狂歌草稿』の内容は、確かに華山の筆跡と思われるもので、四十六首が雑然と書き放ったように連ねられている。そのほとんどは「百人一首」や「古今集」などの古歌を本歌として「本歌取り」「縁語」「掛詞」などの技巧を用いて狂歌としたもので、四十六首すべてに本歌があり、華山の和歌的な素養の一端もつかがわれて興味深いものがある。しかし、狂歌の内容的には、その本歌が即座につかがわれるものがほとんどで、「縁語」「掛詞」などの技巧もいまひとつ乏しく物足りなさを感じるのは私だけではないに違いない。ただ、短期間のうちにこの四十六首もの狂歌を創って示した華山の手際の良さには脱帽で、やはり平素の和歌的な素養あつてのことと感心する次第である。やはり、こうしたことができるのも、当時の狂歌の全盛と華山の幅広い交友の中で培ってきた狂歌の作句力によるものだと云うことをよく理解しておくことが必要である。

華山の生きた時代は、特にまた江戸狂歌の全盛時代に当たっていて、天明期には爆発的に流行し、文学・美術・演劇から音楽に至るまで狂歌の影響を受けるほどで、若い武士から庶民に至るまでこの狂歌を楽しんだ。彼らは、経済的に苦しく、封建社会の堅苦しい枠の中で伸びるよすがもない悩みや苦しみを、この狂歌というひねった形式で吐露し、身のうつぶんをばらしたのである。当時の流行の狂歌の作者としては、唐衣橘州（からごろもきつしゅう）・四方赤良（よものあから）・朱楽菅江（あけらかんこう）・平秩東作（へずつとうさく）・元木綱（もとのもくあみ）・頭光（つぶりのひかる）・紀定丸（きのさだまる）らが居た。そして、文化・文政期になると、更に宿屋飯盛（やどやのめしむり）と鹿都部真顔（しかつべまがお）が対立して覇を競った。しかし、その普及流行とともに職業化する傾向も出てくるに及び、やがて特色を失い、単なる知識人のすさびに過ぎな

いものとなつていき、明治に入つてからはあまり文学的にも意義のないものとなつてしまった。華山は、これらの狂歌作者の幾人かとも交流があり、特に四方赤良（よものあから）・紀定丸（きのさだまる）とは若い頃から親しく付きあつていた仲であつた。四方赤良（よものあから）は後に太田蜀山人（おおたしよくさんじん）といい、この狂歌の中心的人物で、華山の狂歌趣味に大きな影響を与えている人物である。華山の『三宅友信宛書簡（学事応答）』の中で、彼のことを次のように紹介している。

「私朋友取に不足ものなれども、其精力すぐれたる南畝、抄録文集総て四百巻も有之、」

この南畝というのが太田蜀山人のことで、華山のこの語り口の中にその結びつきの深さを見ることができ

儀助とも昵懇で、『全楽堂日録』の天保二年（一八三一）九月朔日と翌日と、華山が彼の所へ訪ねた記録がある。

「九月朔 雨
吉見儀助どのの方へ助郷之事にていたる。帰途立原に至る。
二日
吉見を訪ふ。西堂より甚七津田氏を訪ふ。これ八助郷と御留守居の事にて、日夜塵事に奔走す。此の日、雨」

このように華山は狂歌作者の幾人かとも親しく交流していて、このような狂歌的世界の雰囲気も彼らの狂歌作成のコツもその交流の中から自ずと身につけていたから、このような青年たちの要請にも気軽に対応することができたのであろう。

それにしても、私が感心したのは、この時期の華山の精神の自在さと強靱さである。

楠木華国の解説の一文によれば、華山がこれを書いたのは天保十二年（一八四一）辛丑の夏である。門弟

福田半香の華山生計救済の藩外売画が世評に問題となつたのがその年の三月で、以来華山は五月八日には福田半香宛てに幽居の慎戒と義会の用心をしてもらうよう書簡を送り、七月十八日に作画売り出しの風評を警戒する書簡を人に送り警戒している。しかし、そうした華山の警戒にもかかわらず、九月の初旬頃には華山が半香義会により作画を外に売り出しているという評判がまたに流れ、九月八日には華山もいたたまれなくなつて半香宛てに厳しく警戒してもらうよう呼びかけている。しかし、時既に遅く、九月十二日には絶体絶命の状態となり、今後は一切面会しないようにしたい旨の緊迫した書簡を送っている。

このことから分かるように、華山がこの狂歌を書き記した頃というのは、華山にとっては既にかなり追いつめられた精神状態となつてきていたはずである。とてもこのような狂歌を気楽に書き記しておられるような心境ではなかつたというのが実

情ではないか。それにもかかわらず、このような四十六首もの狂歌を書き残すことができたというのは、やはり華山自身、強い精神力と忍耐力でもって堪え忍びながら、ほんの一時この世の憂さを忘却し、非日常の狂歌の世界に身を任せることによつて、我が身から起こるのではない、全く他人の親切ゆえに引き起こされてくる我が身の不幸をなくさめようとしたのではなかつたらうか。

このあと、十月十日、華山は椿椿山宛てに

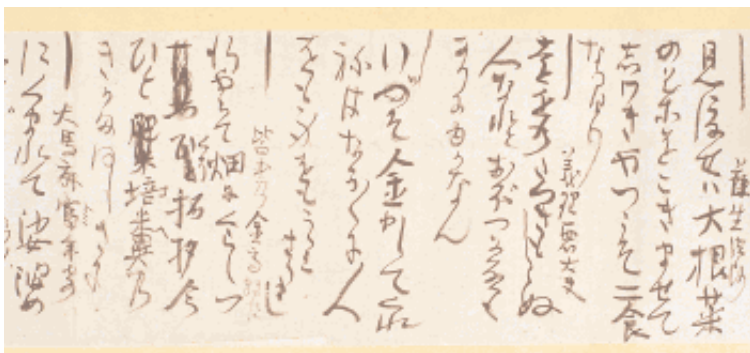
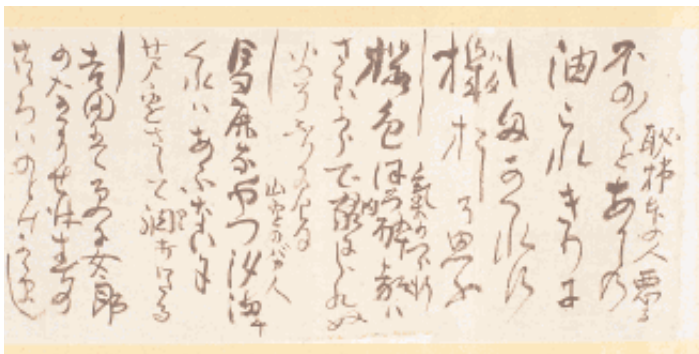
「一筆啓上仕候。私事老母優養仕度より、誤て半香義会ニ感、三月分迄認跡八二半ニ相成り置き候処、追々此節風聞無実之事多、必災至り可申候。然ル上八主人安危にもかゝハリ候間、今晚自殺致し候。(中略)数年之後一変も仕候ハ、可悲人も可有之や。極秘永訣如此候。頓首拝具」

という遺書を送つて翌日の十月十一日に自刃するのであるが、この狂歌を見るにつけても、この遺書の言

葉が思い起されてきて、無念のうち自刃の道を選ばねばならなかつた華山の哀れさが身にしみて思われることである。前書きについての解説が長くなり恐縮であるが、この「自律狂歌草稿」鑑賞にあつては、この草稿と狂歌についてまず概観して

おくことが正しい理解に役立つと考へ敢えて記させていただいた。それでは次回より一首ずつ順に鑑賞していくこととする。

(続)
研究会員 山田哲夫



各地の美術館を訪ねて
「葛生町立
吉澤記念美術館」

栃木県安蘇郡葛生町

中央東1 14 30

☎(〇二八三)八六 二〇〇八
交通 東武佐野線葛生駅

下車徒歩10分



葛生町立吉澤記念美術館は、栃木県安蘇郡葛生町に平成14年6月1日に開館しました。その所蔵コレクションは、江戸時代後期、富農であつた吉澤松堂（兵左衛門、一七八九〜一八六五）にはじまりました。

以来、象水、慎堂、晃南、兵左の五代約二百年にわたつて収集された近世から現代に至る絵画と板谷波山をはじめとした近現代の陶芸が主で、その数は五百十五点に及びます。この美術館は葛生町に在住する吉澤家からコレクションと建物の寄贈を受けて、町が設立したものです。町への寄贈が公に発表されると、コレクション内容の充実とともに、昭和二年に展覧会へ出品されて以来、行方不明となつていた伊藤若冲筆の「菜蟲譜」が発見されたことや渡辺

華山作品も含まれていることが、当時の新聞に掲載され、話題となりました。

東京方面から葛生へ行くためには、まず北千住へ出てから東武伊勢崎線準急で約80分で、群馬県の館林

へ、東武佐野線に乗り換え、約35分で葛生です。駅を出ると、葛生町役場を目指し、徒歩約10分で到着します。

吉澤記念美術館のコレクションの中には、渡辺華山の「風竹図」が含まれています。この作品は、岩を背景に左から右への風を受けてそよぐ二本の竹が中央に描かれています。賛には、日頃から自らの戒めとしていた鄭板橋の詩を引用しています。

衛齋臥聽蕭々竹 疑是民間疾苦声
些小吾曹州刺史 一枝一葉綵関情
余以不敏參藩政時天保七年大風雨火
八年又風大饑民飢我 君發稟賑濟
無一餓享可謂仁政余每讀此 詩警
省以自勗恐有溺其職也松堂望堯索画
并録之松堂佐野農人富而好義若推此
意以庇貧者我画不啻風竹也

その意味は「役所の部屋で横になり、風に鳴る竹のさみしい音を聴いている。それはまるで人々が発する苦しみの声のようだ。下級とはいえず、われわれは地方官なのだ。竹の一枝一葉が、みな気にかかる。」（開館記

念名品展吉澤コレクションの軌跡図録掲載、河野元昭「吉澤コレクションの近世絵画 文人画を中心に」より抜粋）とあり、その後には少し小さな字で吉澤松堂に送る一文が添えられている。その内容は、田原藩による天保の飢饉対策のための義倉からの救米施策を例にあげ、豊かで、義を好む松堂に、この詩の意味をよく理解して、貧しい者を助けてほしい、と記しています。

また、コレクションの中には、華山が蚕社の獄で捕えられ、獄中で書いたものを中心にした椿椿山旧蔵と思われる12通の書簡からなる獄中書簡貼交屏風や松堂が絵を学んだ華山と同じ谷文晁門下で、地元下野出身の高久靄厓の作品も含まれています。

鄭板橋（一六九三〜一七六五）は墨竹、墨蘭にすぐれた中国清代の文人画家で、地方官として窮民救済を行なっています。

田原町博物館学芸員 鈴木利昌

田原南都小学校で
聞きました
華山を知
てますか？

1 とき 平成十四年九月六日(金) 授業後
2 参加してくれた人

岩永雅靖君(6年)、上條敏暉君(6年)、渥美奈保さん(5年)、本多晃大君(5年)

「渡辺華山」という名前を聞いたことある？

児 (口々に) はい、あります。どついう人だと思えますか。

児 絵がきさん。

児 絵がすごく上手。

児 絵が、とつても素晴らしい。

児 絵がとつても上手で、田原で一番えらい人

児 いつごろの人が知ってますか。

児 昭和の前の大正か明治の人。

児 うーん、昭和の初めに亡くなつたと思います。

児 それは、どこで知りましたか。

児 何か読んだことがあるの？

児 博物館へ行って、そういう関係の本があったから、そこで知

つた。

児 ぼくは遠足で行って、博物館

や切腹した所にも行って、それで

知りました。

児 五年生の子はどつですか。

児 博物館で……。

華山は、明治より前の江戸時代

の人なんです。武士の時代の

終わり頃の人、もう亡くなって

から、一六〇年にもなります。

みんな、華山の絵を見て、上手

だなあと思つたということだ

が、絵のどんな所を覚えている

かなあ。

児 今はえのくの色が豊富だけど、

昔はスミとか一本なのに、華山

の絵は、すごく立体感があつて

上手。

児 絵はよく分からないんだけど、

ど、暮らしが貧しくて、絵を売

つて生活した。

児 おいしいちゃんの話で、「華山は

人物画がうまい」と聞いていたんだけど、実際に見たら、すごくうまいと思いました。

児 「雪舟」も絵がうまいら!!

児 そうだね。雪舟は華山よりもう

少し前の時代の人だけだね。

児 室町時代の人。

うん、よく知ってるね。

児 柱にしばられて、涙でネズミ

の絵を描いた話……。

華山の絵について、みんなよく

知ってますね。他の面について

はどうですか。

児 華山は家に閉じ込められて、

そこで生活できなくなつて、そ

れで切腹した。

児 華山が死んだ小屋みたいな所

を見てきました。

児 四十九歳で死んだ。

児 たしか子どもがいて、その人

も絵が上手だった。

華山について書いた本とか伝記

など読んだことはありませんか。

児 教室に、みどりっぽい表紙の

これくらいの本がある。

『少年物語渡辺華山』かな？

児 本は読んでないけど、博物館

とかの場所に行つて、資料を見

たりして勉強した。

今、歴史の勉強は？

児 三人の武将の全国統一のこ

ろです。

もう少しすると、華山の生きた

時代になりますよ。

児 坂本龍馬とか西郷隆盛とかは、

幕府に反対したといつのを知っ

てます。

えらいね。華山は坂本龍馬より

ほんの少し前の人です。華山も

龍馬も同じように新しい時代の

来るのを見通していたんですよ。

児 教室にある本を読もうかな。

また、博物館へも行きたい。

華山という人は、画家だけであ

く、いろいろな面ですぐれた人

多方面で活躍した人なんです。

華山についての本もたくさんあ

りますから、それらを読んで、

もっと正しく、広く勉強してほ

しいと思います。

(聞き手・文責 林和彦)

財団法人華山会から
田原町博物館
のご案内

十月九日～十二月一日

秋の企画展 白井烟崑展 華

山・椿山の画風を継いだ最後の人
(企画展示室)

十月十六日～十二月一日

重要文化財渡辺華山関係資料(特
別展示室)

十二月四日～一月十九日

渡辺華山と画友(特別展示室)

渡辺小華とその一門(企画展示室)

一月二十一日～三月九日

渡辺華山と一族(特別展示室)

鈴木充コレクション(企画展示室)

1)

田原の歴史 学びの場(企画展示室2)

2)

三月十一日～四月二十日

学者としての渡辺華山と師友(特
別展示室)

白井烟崑筆雲行雨施
第5回日展特選 豊橋市美術博物館蔵



山内一誠コレクション 渡辺華山
資料を中心に(企画展示室1)
田原の歴史 目で見る田原 (企
画展示室2)

観覧料

平常展

一般 二二〇円(一六〇円)

企画展時は三〇〇円(二四〇円)

小中生 一〇〇円(八〇円)

()内は二十名以上の団体の料金
毎週月曜日は休館、月曜日が祝日
の場合は翌日

華山・史学研究会

会員募集中

申込場所 華山会館

毎月第四土曜日研究会

視察研修に参加できます。

華山会報第九号

平成一四年一〇月一日発行

編集発行 財団法人華山会

理事長 白井孝市

事務局長 光浦貞佳

千四四一―三三四―二

愛知県渥美郡田原町田原巴江二の一

TEL 五三二・三二一・一七

FAX 五三二・三二一・一七

編集・協力

田原町博物館

華山・史学研究会

会長 渡辺亘祥

林 和彦 尾川新一

山田哲夫 我部山正

林 哲志 小川金一

柴田雅芳 加藤克己

中神昌秀 仲井千恵

華山会報ご希望の方は華山会館・

田原町博物館にお申し出ください。

次回発行予定平成一五年四月二日